# 「夏の肉まん（裏）」

神様に出会った。

「１６時……」  
目覚めたときには夕方だった。  
いつ寝たのだろう。ベッドへ横になった覚えはある。  
企業系のＤＭに返信して、楽曲の使用許可の問い合わせメールに返信して、それから一度シャワーを浴びて、横になって、  
しきらいぶとシキアートのタグを辿って、リプ返して……。  
ひと通りの日課を終えて、ようやく作曲家さんたちのリストをチェックし始めた１２時頃に、寝落ちしたらしい。  
最近、曲作りが疎かになっているなと反省することしきりだ。ＶＴｕｂｅｒの活動が軌道に乗るまではと言い訳してきた  
けど、軌道に乗れば乗るほどシキは忙しくなるばかり。  
寝落ちする前にアカウントを切り替えていた点だけは自分を誉めよう。  
そろそろ起きなければと思い、体の向きを１８０度回転させた。  
違う、起きてない。これ寝返り。

そんなつもりはなかったのに、ふぅと小さなため息が漏れた。  
シキとしての時間が増えるにつれ、ベッドの上で過ごす時間も増えてきた。そのうち寝転がりながら生放送を始めてしまいそうな自分が怖い。  
作曲だけをしていたころの生活も酷いものだったけど、当時はいざフレーズが降りてきて覚醒すると、１日でも２日でも机の前に座っていられた。  
今はなまじ生放送をする時間帯が固定されているせいで、日が変わるくらいまでメールとＤＭに返信、そのあと朝までエゴサというルーチンワークができあがってしまった。  
それも日に日に残業の時間が増えてきた。  
企業や問い合わせのメールは丁寧に返信しなくてはいけないので時間を使う。  
エゴサは楽しいけど、タグを辿っていくだけで、あっという間に時間が過ぎる。  
そしてリプ返。ひとつにつき９０秒を目安にしてるけど、最速でも１時間で４０個しかお返事できない。  
ちょっと面白いことを言おうとして、凝った言い回しを考えると、ひとつのリプを作るのに５分かかる。  
そんな３人分の手間をかけた自信作への返事は一言「ですね笑」。  
しょんぼり。

でも、そんなやりとりが楽しくて、今日はここまでと決めた時間を過ぎても、リスナーさんの感想をいつまでも眺めて過ごしてしまう。  
これはシキの活動に必要、リスナーさんとの触れあいも大切だからと言い聞かせて、一生ベッドの上でもだもだしてる。  
もっと時間を有効に使わないとなあ。なんて反省したフリだけはするけど、ほんとはね、ずっと寝転がりながら過ごすのも嫌いじゃないよ。  
本当にいらないと思ってしまうのは食事に使う時間。  
人間、食事をとらなくても生きていければいいのに。常日頃からそう思う。  
掃除や洗濯に使う時間も惜しいけど、それは生きるために必要ではないのもあって、その気になれば明日でいいやと考えかたを変えてみたら、むしろ作曲やリプ返のいい気分転換となって好きになってきた。  
お風呂はもっと好き。水音は創造力を高めてくれるから。インスピレーションが湧くのはだいたい入浴の時間。最近は湯船の中でリプ返したりもしてる。  
だけど食事は、作るにしても外で食べるにしても一度出かけなくてはいけないし、食べると眠くなるし、食べすぎると苦しくなるし、入れたら出さないといけないし、得るものに対して失う時間が多すぎる。  
外食をすると大抵量が多すぎるので、パンか生の青果以外ではもっぱら自炊だ。今の季節はそうめんを食べつづける。私は麺類を食べるために生まれてきた女。  
ここ１週間は麺類を作るのさえ億劫になって、１日１回ベビーコーンだけを食べている。ベッドへ横たわりながら、野菜だけを食べて生きる私はまさに芋虫。  
あまりにも食事の意味が見出だせなくなり、１週間ほど絶食してみた経験がある。集中力が上がり、作曲は捗り、私はいよいよ無食信仰を深めた。  
でも曲が完成した途端におなかが空いたので、結局は棄教して、中華まんを買ってきて食べた。

はあ、と大きくため息をついた。  
ルーチンワークを毎日毎日こなして、曲作りは明日へ明日へ伸ばして、小さなとうもろこしを１日１回食べて、目が覚めたらまたすぐに生放送を始める芋虫の私。  
なんて、悪い存在のたとえに使ってごめんね芋虫さん。芋虫はいずれ育って綺麗な羽根を生やすもんね。私よりも上等な生き物だよ。  
このままじゃいけない。ずっとそう思ってる。ＶＴｕｂｅｒの活動に熱中するのはいい。でも、それを逃げ道にして作曲から目を逸らすのはよくない。  
生放送はなにが起こるかわからなくて、毎日が楽しいけど、変化をただ待つだけじゃなくて、自分で変化を起こさなくちゃ。  
そうだ、今すぐ起きて外へ出よう。ごろんと１８０度回転した。違う、これ寝返り。  
人間らしい活動をしなくちゃと逸る気持ちは常にあるものの、そう簡単に動ければ世話はない。  
自力では無理そう。助けてレマさん。救いを求めて憧れのＶＴｕｂｅｒの動画を開いた。  
今日の１位は射手座、いいことあるよ。えっ嘘、私１位だ。  
ううん、嘘じゃない。憧れの大先輩の言葉を芋虫の私が否定するなんておこがましい。同じＶＴｕｂｅｒをやってるってだけで、先輩後輩どころかなんの繋がりもないけど。  
いいことがあるなら今日は出かけてみようかな。活動する意欲とともに、ふつふつと食欲が湧いてきた。  
そうだ、もう何日もお肉を食べてない。夕食にはなんでもいいからお肉を食べよう。  
ベッドから起きあがり、お気に入りの服に着替えた。背中から羽根が生えたかのように、今の私はどこまででも行ける。  
とりあえず近所のコンビニまで。  
出かける前にスマホをチェックすると、企業からでもリスナーからでもなく、母親からのメッセージが届いていた。  
「ごはんちゃんと食べてる？」  
「食べてるよ」  
少しフライング気味だけど、そう返事をした。  
憧れの先輩に誓って嘘はつかない。今日はベビーコーン以外のものを食べるんだ。

自分でも厄介だな、と思うのは元気が出ると人の声が聞きたくなる。  
この場合の声というのは他人同士が会話している声ではなく、かつ通信機器を挟まない生の肉声という贅沢なものだ。  
誰かが私に向けてかけてくれる声は、この世界に存在しているかの確認のようなもので、自分がちゃんと周りから見えているんだと安心できる。  
なにが厄介かと言えば、それだけの贅沢を望んでいるにもかかわらず、別の日に同じ人から話しかけられるともうしゃべれなくなってしまう点だ。私が望むのは交友ではなく、その場限り一度だけのインスタントな会話だった。  
以前、あまりにも人恋しくなり、コンビニの店員さんに話しかけたことがある。良い切り出しかたが思いつかなかったので「どのスイーツがおすすめですか？」なんて、洋菓子店で聞けよと呆れられそうな質問をした。  
声をかけた店員さんは嫌そうな顔をせず質問に答えてくれて、その日はとても満たされた。だけど後日、同じコンビニを利用したら同じ店員さんに話しかけられてしまい、以降そのコンビニには行ってない。本当にごめんなさい。  
おじいちゃんおばあちゃんは好き。話しかけても嬉しそうに応えてくれるから。でも、このあいだ近所のおばあちゃんだと知らずに話しかけてしまい、町内会の集まりに来てくれと懇願され、断るのにとても苦労したので、最近はお年寄りに話しかけるのも躊躇するようになってしまった。  
子どもも好きだけど、知らない子どもばかりに声をかけていたらただの不審者だなと思い、ほどほどにしている。  
かと言って同年代の女性に話しかけて交友が生まれるのも怖いし、男性は存在自体が怖いので、実質もう詰んでいる。老若男女以外の誰かが、たまたま通りがからないかな。  
老若男女以外の誰かって何者だろう。神様かな。

お肉を目的にコンビニへ入り、すぐ目に映ったものは、レジカウンターの上にそびえ立った銀色のガラスケースだった。  
「これだ」と思った。ベビーコーンばかり食べてやせ細った私の胃に、ちょうど良い量のお肉。  
中華まんの種類が気になったけど、あのうず高い形は肉まんに違いない。外の気温の高さも忘れて、いまお肉を食べるならこれしかないと心に決めた。  
運良くあと一つだけ残っている。やはり大先輩の占いは間違ってなかった。  
私は喜び勇んで、周りもよく見ないまま店員さんに注文した。

「申し訳ありません、この肉まんは、あちらのお客様が先に注文されたので、譲っていただいてもいいですか？」

あ……。  
なんて勇み足。ここが土俵なら私は大恥をかいてる。ううん、今まさに恥ずかしさでいたたまれない。  
食い気味に注文してしまったのが、とても痛い。どうしてあと１分待てなかったのだろう。一度店内を見て回るか、せめてあの中華まんが本当に肉まんであるか確認すればよかった。  
先に注文したお客さんも私を見てる。  
どうしよう「やっぱりいいです」って言わなきゃ。でも、今日はお肉……。

「フラッペを」

相手のかたから譲ってくれないかなとズルいことを考えていたら、本当に注文を変えてくれた。  
そのタイミングがあまりにも期待と重なったせいで、しばし呆然とした私は、ありがとうございますの一言も口にできないまま、かかしみたいに突ったって相手のかたを見つめてしまった。  
やがてその人は、どこかで聞き覚えのあるメロディーをぼそぼそと口にしながら、私と目を合わせることもなく店を出ていってしまった。  
これは、なんという奇跡だろう。いま私が触れたものは親切だ。  
一期一会の親切は、人間のあらゆる感情の中で、最も尊い部類のものだと思っている。見返りもなく下心もなく、断られれば重ねて押しつけないのが本物の親切だ。  
今の人は黙って去ってしまった。このあとで私が後ろめたさを覚えたとしても、それにすらあの人は興味がないんだ。親切を施したあとの結果に頓着しないとは、なんて真っ当な好意だろう。  
見知らぬ人に話しかけて、ようやく己を認識できる私にとって、これほどの頼もしさはそうもない。  
あの人の世界の中に、私は確かに好意を向ける対象として存在したのだ。  
「あなたはここに居てもいい」  
そう認められた思いだ。人間になれた気がした。  
せっかく無頓着な親切を施されたのだから、その好意に感謝して、きょう一日の残りを満足感に包まれて過ごすのが、このあとの私の正しい在り方だろう。  
なのに、自分のズルさが尾を引いた。せっかく認めてもらった己の存在が、たまらなく矮小なものに感じられた。  
卑怯とまで思った。  
ズルいことを考えて、親切なひとに遠慮までしてもらったのに、ここでお礼が言えなければ、私の口はなんのために付いているんだろう。  
それは自分の背中を押すための理由付けだったのかもしれない。親切な人に話しかけてみたいだけの気もする。なにせいま私は、この世界で人と繋がっている充実感に満たされていた。  
姿は見えなくなってしまったけど、追おう。まるで初めて生放送をした日のように興奮した。  
「あの、肉まん包んで……いいんですよね？」  
「あっごめんなさい買います！」  
ただ、後を追う前に、きちんと支払いを済ませなければいけなかった。慌てて取りだした財布の中身をレジのカウンターにぶちまけて、店員さんに何度も謝罪した。

見失ったかと思い焦ったけど、その人はすぐ近くの公園で見つけられた。  
しかし、いざ声をかけるとなると緊張する。事務会話以外で自分から男性に話しかけるのなんて、本当にいつぶりだろう。  
初めてかもしれない。 しかもよく見れば、いま通っている学園の制服を着ている。それにも怯みかけたけど、考えてみれば登校なんてしていないのだから、学園で再会するという点での不安は消えた。  
最も恐れるのは期待した人柄とぜんぜん違った場合だ。とてつもなく自分勝手な話だけど、私はいま、確実に理想を抱いている。私にとって話しやすい人であればいいなと、都合のいいことを考えている。  
そんな傲慢を人に押しつけては、いい年して子どもみたいな我儘を言うのはやめなさいと言わんばかりに、何度も現実に打ちのめされてきた。いつも話しはじめて数分後には、何を言っていいかわからなくなり黙りこんでしまう。  
だけど、目的の人のベンチで座る姿に勇気を後押しされた。猫背で丸まって座って、こんなこと思っちゃいけないけど、なんだかおじいちゃんみたい。その縮こまった姿に安心してしまった。  
こちらが話しかけるのだから、自分のしたい話題だけを一方的に投げるのではなく、お相手のかたとの会話を心がけよう。もし嫌そうにされたらお礼だけ言ってすぐに立ちさろう。覚悟を決めて声を搾りだした。

「ぁ、あの」

　　　　　　　＊　　　　　　　　　　＊　　　　　　　　　　＊

すごく、素敵な人だった。  
不器用なんだと態度でわかる人だった。会話に慣れていない話しかたが、私にとってはありがたくて、これから口にする言葉を焦らずにゆっくりと選ぶことができた。  
私は、考えながら喋ろうとすると、どうしても黙っている時間ができてしまう。普段はその無言の間がとても辛かった。  
だけどいま隣にいる人は、黙っていても、私と同じようにしゃべる言葉を選んでいるんだろうなというのが伝わってきて、無言のままでも苦にならなかった。  
どうしよう。会話の間の取りかたが、これほど合う人なんて世の中にいるんだ。  
私、いま人と会話してる。すごく居心地がいい。夢みたい。  
少し図々しく、身の上話なんかもしてしまった。だけど、嫌な顔はおろか、過剰に驚いたり、憐れむような目を私に向けたりもしなかった。  
もし兄妹がいたらこんなかんじなのかな。もっとこの人と話したい。

「あっ、俺も観る観る。超観る。ＶＴｕｂｅｒとか大好き」

好きな趣味のジャンルも近かった。というよりも、自分の今いる世界とあまりに近すぎる話題を出されて、少なからず動揺した。 あのとき、コンビニを出る間際に口ずさんでいたメロディーは。もしかしてとは思ったけど、それが事実である可能性が高まると、とても興奮を抑えきれなくなってきた。

「シキちゃんの新曲『ｓｎｏｗ』聴いた！？　電子音の上にシキちゃんの透き通るような声が乗るとヤバいよね。雪が積もった真っ白な世界にいくらでも浸れる」

「イラストも俺の推し絵師の『ののかさん』に描いてもらっててさ。こないだの新衣装も可愛くて、シキちゃんほんとよかったねって」

「バーチャルシンガーのライブ、今盛りあがってるし、もしシキちゃんがライブやるなら、俺も引きこもり返上して、初めてチケット取ろうか悩むくらい」

無理むり駄目むりこれ駄目興奮なんて生易しいものじゃなくて今まで生きてきた中で最高にドキドキする。  
嬉しい、文字で読むのと違う、生の応援の声ってこんなに嬉しいものなんだ。いけないこのままじゃ泣いちゃう。  
ていうか今の時点でちょっと泣いてる。  
息が詰まるって苦しい場面で使う慣用句かと思ってたけど、嬉しくて仕方ない場合にも使うんだね。脳が呼吸困難に陥ってるのがわかる。頭が真っ白になって気絶しそう。  
こんなに恥ずかしくて、でも嬉しくて興奮したのは初めての経験だったから、酸欠で倒れる前に、失礼だけどお別れさせてもらった。  
でも、しっかりと次に会う約束をした。今だって、ほんとはもっと話したい。私の体が耐えきれないだけ。  
天にも昇るような心地で自分の家へ帰ると、急にお腹が鳴りはじめた。公園にいるときに音が出なくて本当によかった。  
これだけ食欲が湧いたのはいつ以来だろう。肉まんだけじゃなくて、ちゃんとしたお肉料理が食べたい。

千玉駅前の洋食屋さんへ向かうバスの中で、神社の前を通りすぎた。そういえば私、老若男女の誰とも話せないはずだったのに、もしかしてあの人、神様だったのかな。  
イメージ的には教会のほうなんだけどな。くすりと笑いつつ、この時間に神社へ寄り道する気にはなれなかったので、心の中で手を合わせた。  
大先輩雨野葉レマ様、ありがとうございます。今日の射手座はいいことありました。  
画面上では１度しか押せないけど、心の高評価ボタンを７兆回押しておきますね。よろしければ私の「Ｓｉｋｉ　Ｃｈ．」もチャンネル登録お願いします。